

あなた達は何も悪くありません。悪くないのだけれど、あなた達の幸せが、私にはとても憎いのです。

二つ、願いを叶えてください神様。

一つ、私もあの人達の様な、素晴らしい才能が欲しいのです。

二つ、私もあの人達の様な、金や知識が欲しいのです。

全てを手にした時、私は初めてあの人達と同じ、人間になれたと感じるでしょう。

私を人間として殺したいのなら、まず私を人間として生かしてくださいな。

あの人達はとても素晴らしいです。私がどれだけ努力しても、指一本すら届かないほど高い場所にいます。

私の様な者は、生きている価値が無いのです。

あの人達の呼吸を、価値の無い私が奪うのは、大変重い罪になるでしょう。

私には、その罪を償う覚悟なんてありませんから、今日もそつと息を殺して生活しているのです。

嗚呼どうか、私の様な者にも、悲しむ資格を下さいな。

願うことさえ許されないのでしょうか？

それならば、どうして私なんかをお産みになったのですか。

一時の快樂が欲しかっただけでしょうか。私が生まれてくるのは予想外だったのでしょうか。

何度も、何度だってお聞きになります。

それほど必死なのです。

私には、その答えを知る以外無いのです。

私がこうなってしまったのは全て、私のせいなのでしょうか。

きっとそうだ、そうに違いませんよ。

何故なら私は、私だからです。

今日こそ変わったかしら。

どれだけ期待しても、私は私のままで、素晴らしい人達も、また素晴らしかったのです。少し口調を変えてみても、私への態度は変わりません。

当たり前です。だって、私は、私だったんですから。

私はもう私であることを諦めていたりします。

この身分は、一生変わらないのです。

私がこの身分であるのは、上手く徳を積みなかった私が全部悪いのです。

あの人達が素晴らしさの証を手にする度、私は心からそれを羨ましく思い、そして決まっ

表彰なんて、きっと少数しかまともに聞いていないだろうに。

あの人は、何の証も持たない私にも、お声を掛けてくださるのです。

私なんかと話して、何か得があるのでしょいか。

「私は誰にだって優しい人間である」

ということを、改めて世に伝えたかったのでしょうか。

私にはその心理がわかりません。

私だけが、いつも後ろなのです。

石ころを蹴っても、私は変わらない。蹴るから変わらないのか？よく分からないけれど、私は誰よりもあの人達を憎み、誰よりもあの人達を尊敬していました。

まだあの人達がどんな作品で受賞したのかも分かりません。分からないのに、羨ましいのです。

そう考えると、私の今までの感情は、色んな人々の前で、堂々と功績を発表してもらい、人々からすごい奴だと思われたい欲求だったのかもしれませんが。

私はなんて弱いんだ。

弱いものは守らなきゃいけない？それは、私に対しては違います。

弱くても、守りたいと普通は思わないですよ。これは、自分だからでは無いんです。私は人前では強気ですから。

弱いなんて、誰も思わないでしょう？

きっと弱い面を見せたって、また何かの冗談としか思ってくれないでしょう。

それならもういいんです。いっそのことそのまま知らぬ振りを貫き私の心をさらに痛めつけ、私を殺してください。

作品には、命がかかっています。どんなものでも。それを完成させるのに、限られた人生の時間を消費したわけですから。

あなたがしている事に命がかかっていないものなんてないのです。

私が今まで手掛けてきた作品だって、命がかかっているのに。

みんなを表彰するべきだ。どんなに酷い内容であっても、それを考えたりした時間にも、命がかかっているのですから。

それならあの人達はなんなのでしょう？

誰よりも時間をかけた人達なのですか？私なんかよりも、ずっと、ずっと。

違います。あれは完全に、大人たちの好みですよ。

考えているうちに腹が立ってきました。

私がどれだけ頑張っても、好みじゃなければすぐゴミ箱行きなんです。

作品を作るのも、作品を評価するのも、どちらも人間であると言うことに私は違和感を覚え
えます。

なぜならそれは、自己評価と同じだからです。

それならわざわざ表彰する意味もないでしょう。

一人でできるんですから。

作文は、この程度でよかったでしょうか。私はその文章をそっくりそのまま書き写し、大人たちに見せました。すると大人たちは私の文を、素晴らしいとお褒めになりました。素晴らしい？それなら私は、あの人達と同じになれたということなのですか？

こんな文を書ける私は、価値があるでしょうか。

嗚呼、神様。お願いごとが叶いました。

神様。私はもう人間です。

そうですね？

『あいつは化け物だ』

少し才能があるだけで皆、私を化け物だと言う。

嬉しい方の意味なのは分かっているけれど、それでも何か嫌だった。

次の月に、また表彰式がある。

正直もう飽きた。こんなの貰ったところで、私が生きる意味にはならないんだ。

それなのに、私への評価は止まない。

私がもう嫌になり、適当に作った作品にも高評価。

もう辞めて、もう辞めて。

あれだけ見たかった景色がこんな物なんて、想像していなかったよ。

私が表彰台に立つようになってから、あの人達の凄さは私から見れば大した事ないように思えてしまうようになった。

――神は才能を与えすぎたのだ。

そう、そうだ。全ては神のせいだ。

私はなんにも悪くない！

私は被害者である。私はただ、素敵な人間になりたかっただけだったのに、こんなことになって。

神は私の本心を、見抜けなかった。

だからこんな馬鹿な真似をしたんだ。

神は、神なんかじゃない。みんなが祀るあれは、違う。あれは、何かだ。目に見えない物だ。非科学的だ。

――神は、私だ。